

國學院大學學術情報リポジトリ

生成と統合の日本的神学思想の構造と解釈に関する
考察：

種に心身論と超越論の観点から山崎闇齋思想の位置
についての検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 隆司, Kubo, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002501

久保 隆司 提出 学位申請論文

『生成と統合の日本的神学思想の構造と解釈に関する考察

―主に心身論と超越論の観点から山崎闇齋思想の位置についての検討―』

審査要旨

論文の内容の要旨

久保隆司氏は心理学におけるエキスパートである。だが、ここ十年は山崎闇齋の神学・思想が、世界哲学／世界思想史に適正に位置付けられる、と仮定して、それを証明するべく研究してきた。本論は、その研究の一定の成果が得られたとして提出されたもので、風土論・身心論・超越論の三部からなる。

「はじめに」にある序章「闇齋思想の本質と現代的意義に関する基礎的枠組みの考察」では、本論の目的を説く。闇齋がどのような問題意識を持って生き、考え、

行動したかの本質の探究を基礎におき、広く世界哲学／世界思想の文脈から、閻斎ならびにその神学・思想を様々な人が論じることができるような「スペース」の確保、ならびにたたき台としての「プラットフォーム」の仮構築を目指したことを明かす。そこで、閻斎の思想にある意味、より宗教的・哲学的に普遍性を持つ「大きな物語」を見出すため、古今東西の歴史や思想の中に通じる問題意識や見識、知恵を求め、その思想世界の全体像らしきものを示せることを試みたという。

第一部（風土論）では、近世前半の山崎閻斎の神学思想の再検証を目的とし、彼が生まれ、育った文化的環境および社会的環境の一端を描く。

第一章「山崎閻斎の神学思想における基盤としての主に「共時性」に関する考察」では、レヴィーストロースの「野生の思考」やユングの「シンクロニシティ（共時性）」概念の導入による共時的な思想的風土の状態を扱い、『大和小学』から、日吉神社と閻斎との間に様々な潜在的な関係性を提示する。

第二章「山王」を母体とする「神仏習合」形成と「統合的神学」展開の考察」では、前章での「共時性」に対し、本章では「通時性」に注目する。そこで「ミーム」概念の導入による通時的な宗教的風土形成、具体的には「山王」に注目し、それを神学的母体とした闇斎と天海を比較検討する。そして、天海はミームプールである比叡山との本質的なつながりを絶ち、千年のリソースを否定、流用、形骸化したのに対し、闇斎は個人の内面を大切にし、朱子学の影響も受けた近世的自我意識をもとに、祭政一致的な新しい統合神学構築を目指したとする。

第三章「山崎闇斎の神道神学思想と江戸前期の朝幕関係の解釈について」では、前章に引き続き闇斎と天海を比較し、前者は天皇を核とする「神儒兼学」思想、後者は将軍を核とする「神仏習合」思想との対立とみる。そして、闇斎の朝幕理解について、天上天下は天上の天照大神の一元支配であり、「国譲り」的な概念はなく、天皇も将軍も共に「御一体」であり、闇斎にとって大政委任論はそもそも存在せず、天下を治める役割の幕府側が、天上にまで強い影響を及ぼさうとするのは筋違いだ、とするのが闇斎の考えとする。

補論1 「垂加神道と吉田神道との「遠い距離」についての考察」では、闇齋のライフサイクルを知ること、闇齋の一生の整理を試みる。

第二部（身心論）では、比較思想的、世界哲学的、グローバル・ヒストリーの観点より、近世における闇齋思想の位置を検討する。なかでも、身心論に関わるフランス思想や朱子学との比較思想的考察を交えながら、近世初期における闇齋の身心論的構造から、「身心統合」の重要性と「神儒兼学」の意味と思想的背景を探る。

第四章 「闇齋神学における身心論的課題と比較思想的展開について」では、第一次グローバリゼーション期の日本とフランスを中心とする東西の近代的身心論の萌芽を、闇齋とデカルトに見る。そして、闇齋は神道実践から、身心の一元論Ⅱ統合論の安心を「生成」プロセスに見出したと推察する。

第五章 「近世近代移行期における身心を基盤とした発達論的思想の比較考察」では、デカルトの身心二元論に反対したメーヌ・ド・ビランの身心関係を中心

とする哲学を概観し、闇斎の心身観と比較検討することで、闇斎の神儒兼学による認識論、方法論が、普遍性を持つことの確証に至ったとする。

第六章「敬義内外」説と「神儒兼学」との関係性における闇斎神学の構造的
理解について」では、「神儒兼学」のなかで闇斎が「神垂冥加之人」へ成長する
修養モデルを提示し、心身論から「統合学」へという大きな流れの雛形を、闇
斎は示したとする。

補論2「デカルトの「理神―理性」と闇斎の「心神―大和魂」概念の変容を
グローバル・ヒストリーの概観する」では、日本の思想史も世界哲学の大き
な流れ、動向の一部として繋がり、機能していることの大枠を掴もうとする試
みから、デカルトと闇斎の心身論を比較する。

第三部（超越論）では、山崎闇斎の葛藤と超克の思想形成プロセスを検討す
るなかで、「心身統合」の意味と意識の高次段階への飛躍・超越の問題、すなわ
ち「永遠の哲学」を扱う。

第七章「宗教思想家の内面的「葛藤」と「超克」プロセスの構造と解釈について」では、闇斎の転換期における内面形成プロセスを推定し、そのモデル化を試みる。そして、闇斎が直面した「合理主義の壁」に対する葛藤のダイナミックス（合理的な朱子学と非合理的な神道）と超克（祈願による神人合一）の意識変容プロセスの心理的構造を探求する。

第八章「井筒俊彦の「神秘哲学」概念導入による山崎闇斎の神学思想の再評価について」では、神代紀研究を通じて、闇斎の合理段階から超個的領域（天人唯一／神人合一）への成長のプロセスに注目する。そのなかで、闇斎神学とは、垂直段階的に構築された神儒兼学の統合体系であり、近世近代における日本では希有な神秘哲学大系であることを示す。そして、統合的な神学理解の基盤としての朱子学との兼学が、本来、闇斎の構想した「神儒兼学」であったとする。第九章「井筒俊彦の啓示類型論から見る「心神との対話」構造とその解釈」では、神と人の「コミュニケーション」について考察し、二人称的な事例を取り上げ、「神人合一」の一つの究極は「生祠」であると示す。

補論3「神学における生成論と心身論と超越論の統合への準備について」では、東方教会の「神化」問題と閻斎の天人唯一とを比較検討する。「神化」とは神と人間とのコミュニケーションの方法である。閻斎は、一心不乱の祈り／祈祷的行為（神垂祈祷）と無条件の受け身での神の慈悲を受け取る（冥加正直）という態度を通じて、「神垂冥加の人」になったことでダイアローグによるコミュニケーションが成立したとする。

補論4「永遠の哲学」と「神秘哲学」と「天人唯一」とでは、閻斎の天人唯一と「永遠の哲学」と「神秘哲学」との関係を検討する。そして、閻斎が「永遠の哲学」（神秘哲学）を構築した理由は、この世界の真理・実相を知るためであったとする。

終章「生成と統合の神学」としての閻斎思想の位置について」では、本論の結論を説く。閻斎の神学思想は、「神儒兼学」にもとづいて「天人唯一」を自覚自認するための一貫した生涯学習体系であった。閻斎は、「神儒兼学」として普遍哲学（朱子学）と神秘主義（神道実践）の異なる二つの思想を、「天人唯一」

の原理のもとにおいての統合の実現を図ったとする。よって、闇斎は近世日本において本格的な統合体系を構築した希有な宗教的、思想的存在として、世界思想史上に位置づけられるに相応しい人物であるとする。

論文審査の結果の要旨

この学位請求論文は、山崎闇斎に三つの視点から光を当てて全体像を浮き上がらせて、多方面に関連する問題提起をした、労作である。三点に絞って、評価・アドバイスを行なう。

(一) 全体の構成について

三部構成が、闇斎の政治思想、宗教思想、実践方法に対応しており、効果的である。

第一部（風土論）は、「山王」という歴史地理的な環境との関連で、闇斎のライフヒストリーの基盤が描かれ、特殊日本的、特殊日吉的な側面が浮き彫りになり、皇室中心の政治思想とのつながりが理解できるように思う。とくに、天海と

の対比は、先行研究の網羅的な調査が行われていないところは不安だが、皇室と幕府の緊張を、法度や神器と絡めて論じており、スリリングである。

第二部（心身論）は、おもにフランスの身心論と対比した闇斎の特徴が描かれ、とくに補論2でのデカルトとの対比は、十七世紀という同じ時代、第一次グローバル化の時代において、デカルトが「理性」を、闇斎が「心神」を、人間の核心に位置づけたことが、それぞれ東西においてパラレルであるとの指摘は、闇斎を世界思想史、比較思想史のアーリーナに引き出す効果が大きい。これも先行研究の網羅的な調査が行われていれば、より評価できよう。

第三部（超越論）は、神秘哲学・永遠の哲学をモデルに、東方キリスト教の心身技法などと、闇斎の実践を対比しながら相同性を示しており、神秘主義研究の分野に闇斎を位置づける事例研究として示唆を与える。神道行法の研究では、大本教や川面凡児など近代以降のものが知られているが、近世の「行法」は研究が薄いところなので、資料によってというより、モデルを用いた比較によってアプローチするのは、効果的と思う。

(二) 方法論について

文献による実証研究には限界があるテーマについて、またもし文献があっても、言葉を超えると自認されている体験を扱うには、関係諸学を援用するという方法は有効である。資料や文献のみを用いた実証研究とは意識的に距離をとって、大きな物語、モデルを作成することは、さまざまな関連分野に刺激を与えらると思う。専門ではない分野の援用に関しては、モデル的な理解を目指す場合は、細部の細かい議論はむしろ障害であること、主対象が神道であることを、断ればよいと思う。

発達論的な心理学を方法として持っていることは、全体にわたって、有利な点と思われる。

(三) 天人唯一について

キーワードの「天人唯一」は、多義的とされるが、これが三部構成の主題において、それぞれ特徴的な意義を持っているように思う。人間一般のあり方としては、天地自然と人間の関係として、また神々や先祖との血縁関係として説かれ、

とくに天皇を指す場合は、政教関係論のキーワードとなり、これは第一部の重要な課題となる。天海との対決の文脈で論じてもらうと、わかりやすい。垂加神道の一部が江戸時代末の尊王攘夷思想につながったということは、神道的な特殊性と「神秘哲学」的な普遍性を調整・調停しようとする閻斎の試みが、天皇の唯一性（特殊）を説明するという難題を負っていたようにも思われる。

ただし、課題も残る。たとえば、第二部・第三部の身心論や神秘哲学論との関係では、身体・物質と精神・霊といった哲学、究極の原理との関係、それをもとにした身心技法の目標を示しているようであっても、政教関係の議論にはならないのではないだろうか。

また、朱子学における心と身の区別の特徴について、その基礎をなしている理気説から、閻斎の身心論がどのように導出されているのか、「心」と「身」の語義や含意はどのようなものであるのか、との点についての説明がやや不足していると思われる。この点を解明すれば、閻斎が神儒一致ではなく神儒兼学という態

度に立脚し、崎門学のみならず垂加神道を展開したこの意味が一層明確になるのではないだろうか。

さらに、闇斎の「天人唯一」と「永遠の哲学」との類比を探った点にも疑問が残る。中国思想の「天人合一」は、非血縁的であり、必ずしも歴史事実が問われないので、超歴史的な「永遠の哲学」と類比できよう。それに対し、「天人唯一」を皇統という血縁的歴史事実を無視して論ずることはできない。したがって、「天人唯一」と「永遠の哲学」を類比的に扱うことに一抹の不安を覚えた。

しかしながら、以上の点は、本論文の欠点というわけではなく、今後の研究において展開を期待する点である。

以上の審査結果によって、本論文の提出者久保隆司は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認める。

令和三年十二月二日

主 査	副 査	副 査
國學院大學教授	國學院大學教授	筑波大學教授
西 岡 和 彦	遠 藤 潤	津 城 寛 文
印	印	印

久保 隆司 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和三年十二月二日

学力確認担当者

主 査	國學院大學教授	西 岡 和 彦	印
副 査	國學院大學教授	遠 藤 潤	印
副 査	筑波大学教授	津 城 寛 文	印